

当事者、関係者の意見のフィードバックを繰り返し、  
屈指の充実した鑑賞環境を提供

## 「バリアフリー能」の取組

### 横浜能楽堂（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）

#### 秦野 五花

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 横浜能楽堂 担当リーダー

#### 遠山 香織

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 横浜能楽堂 プロデューサー

「より多くの方へ能・狂言を届けたい」という思いから、平成12年から年1回のペースで続けている「バリアフリー能」。字幕配信、音声ガイド、ポディソニックといった鑑賞サポートサービスだけでなく、車椅子席の増設、点字チラシの配布、駅からの送迎など多様なサービスを提供している。これら充実した鑑賞環境の提供は、当事者や関係者の意見を伺い、フィードバックと改善を繰り返し作り上げてきたものである。長く続けてきたことで本施設の事業として定着し、利用者や設置自治体からも広く認知されているとともに、職員の知識や経験値も蓄積され、それらがまたお客様のサポートに生かされるなど好循環を生み出している。

#### ●事業を始めたきっかけ

横浜能楽堂は、もともと多様な人々が能楽を楽しめる「敷居の低い能楽堂」をコンセプトに環境づくりに取り組んでおり、子育て中の親御さんが鑑賞しやすいよう、お昼の時間帯に「ランチ能」などを開催してきた。そのような取組の一環として、能楽堂を貸切りにして、知的障がい者のグループホームの方に能を鑑賞していただく会を実施した際、芸術監督の中村雅之氏が、その方々が能を楽しんでいる様子を見て、「能を見てもらうべき、忘れられた人たちがいた」と気づいたことがきっかけとなった。そこから、公共文化施設として障がいのある人にも能を楽しんでもらう事業に取り組むべきだと考え始め、平成12年にスタートした。

#### ●事業の目的

障がいの有無に関わらず、また、障がいの種別を問わず、すべての人を対象とした「バリアフリー能」では、「健常者も障がい者も一緒に能を楽しめる場をつくる」ことを目指しており、来られない人の理由を取り除き、鑑賞できるような環境づくりを行う。

さまざまな方が公演を楽しめるように音声ガイド、手話通訳、字幕配信等の鑑賞サポートの用意や、公演中の入退場自由、介助者1名無料などのサポートを行い、能狂言を知っていただき鑑賞機会の拡大につなげる。

#### ●取組の内容

##### 【開催時期と事前説明会】

気候がよくお客様が外出しやすい3月に設定している。また、バリアフリー能を実施する前に、「バリアフリー施設見学会」と称して、能楽の基礎知識や能舞台のしくみなどをサポート付きで学べるバックヤードツアーを行っている。安心して来場できることを知っていただける機会にもなっており、見学会後にチケットを購入してお帰りになるお客様が多い。



公演チラシ

### 【演目選定の工夫】

演目は、能、狂言ともに動きが多く、上演時間が短いものを選び、初心者でも楽しみやすいように配慮している。

### 【パンフレットの工夫】

曲目解説、場面の説明、謡全文、ルビ等を記したパンフレットを配布している。この中に掲載している謡全文はそのまま字幕配信にも利用している。事業開始当初はホチキス止めをしていたが、ホチキスが危険であるとの指摘があり、二つ折りして束ね折り目の部分をゴムで止める方法に改善した。また、知的障がい者にとってイラストがあるとわかりやすいという声を受け、平成27年から登場人物を識別しやすくするためのイラストも掲載している。

### 【タブレット字幕とボディソニックの併用】

あらかじめ設定したタイミングで字幕解説を表示する「能サポ」というアプリを導入し、タブレットで字幕が読めるようにしている。また、音楽の振動を身体に伝える体感音響システム「ボディソニック」も導入、令和5年は用意した20席が満席になった。字幕を追うだけでは淡々とした鑑賞となるが、これを併用することで、聴覚障がい者にも盛り上がっている場面が伝わり、より充実した観劇体験になるという感想が聞かれた。

### 【当事者との意見交換】

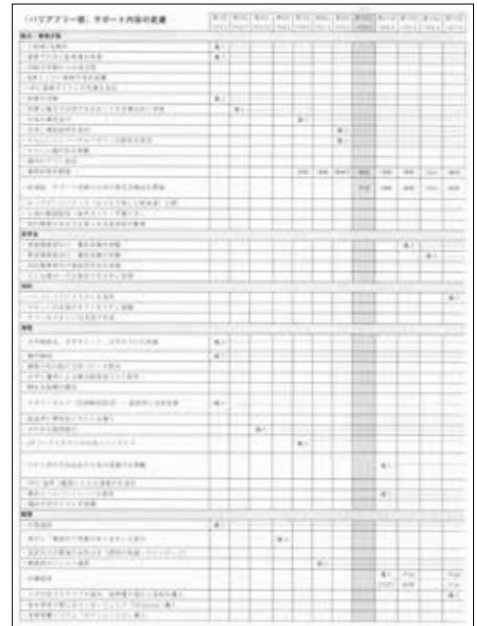
コロナ禍以前は、公演後に障がい当事者の方に集まっていただき、ご意見を直接伺う意見交換会を設けていた。同じ種類の障がいでも、能体験の有無や個々の感覚の違いにより、音声ガイドが「ある方がいい」「ない方がいい」に分かれるなど、それぞれの意見がある。当事者の意見を直接聞くことにより、実態の理解が進むと同時に、運営していく上で励みにもなる。そこで出た意見を翌年度の公演にフィードバックし、取組の積み重ねやブラッシュアップを行ってきた。この会以外でも実施後に当事者、関係者の意見を聞いて、改善を繰り返している。

### 【その他の例】

- ・送迎サービス：施設が急坂の上にあるため、利用者の要望に応え、令和5年（令和4年度）から開始。当日は福祉車両のタクシーをチャーターし、職員が桜木町駅で案内の看板を持って待機し、タクシーで往復していただいた。
- ・公演情報を伝える点字チラシ、点字解説文、能舞台などの特殊な形状を伝えられるよう、点字と凹凸印刷（サーモフォーム）による「能舞台の触図」のほか、当日は「触れる能面・能舞台模型」などを用意。
- ・すべての方へのサポートは難しく、「足りていない部分はお申し出ください」というスタンスをとっている。過去に「B席の車いす席がない」というご意見を受けたときは、B席の椅子を外して車いす席にするなどの対応をした。

### ●実施体制・研修

当初は担当者が1人だったが、サポート内容の増加に伴い、近年は2人体制で実施している。サポート内容の多さもあり、それでも余裕はない。公演当日は職員全員が対応し、また、財団内で応援してもらえる



取組例



パンフレット

方にもスタッフとして参加してもらっている。これは財団内でのノウハウの共有にもつながっている。公演実施前には障がい者に関する職員研修を行っている。テーマは毎年異なり、講師を外部から呼ぶ場合も、内部で行う場合もある。外部講師としては、これまで特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-Net）、公益社団法人横浜市身体障害者団体連合会、社会福祉施設の施設長等に依頼した。関係団体からテーマにふさわしい方を紹介していただくこともあり、地元の団体とつながる機会ともなっている。

## ●事業担当者の感想と施設の変化

- ・社会の技術革新の情報収集を行い、常にアップデートをする必要があるところ、それによりお客様が喜んでくれることにやりがいを感じている。
- ・視覚障がいの方から「すり足で移動していく音がよく聞こえるから、橋掛かりの近くの席がよい」という話を聞き、初めて演者の動作に伴うさまざまな音を意識するようになり、能に対する解像度が上がった体験がある。異なる感覚をもつ方々の話から新しい気づきを得ることも多く、単にこちらがサポートするだけではない、学びが多い機会だと思っている。
- ・この事業を担当したことで、駅のエレベーターの位置やトイレの様式などに意識が向くようになるなど、自分の日常も変化した。自分とは異なる目線の人がいるということが、自分の中にインプットされた感覚がある。最初は知らないうちに失礼なことをしてしまうのではないかとという怖さがあったが、次第に“おなじ人同士”であるとわかってきた。専門的な対応をする技術、知識も増えたが、知ったことで心のハードルが下がったなど変化があった。

## ●設置自治体の評価

能楽堂がバリアフリー能を行うことが当たり前のこととして定着しており、市の代表的な社会包摂事業として認知されている（健康福祉局など）。時代的に注目されている分野でもあり、一定の評価をいただいていると思っている。

## ●事業の課題

- ・実施の意義が大きく、回数を増やしてほしいといった要望もあり実施回数をもっと増やせるとよいが、現状は予算的にも人手的にも年に1回行うのがやっとである。
- ・実施するサポート内容とニーズのバランスをとるのは難しい。新たな取組によりニーズが顕在化することもある。
- ・以前は障がいごとに分けて実施していたバリアフリー施設見学会を、令和3年度は障がい種別に関わらない形で行ったところ、複合障がい（盲ろう）の方の申込があり、より機会を広げることができた。その一方で皆一緒に参加となると視覚障がい者には触図を用いて説明するなど、特性ごとに分けて説明したほうがよい場面もあった。障がい種別に関わらず皆と一緒に実施するのが理想だが、効率を考えた場合、分けて実施する形になるところにジレンマを感じる。

## ●今後の展開

前年度の意見をフィードバックして改善・新規導入等の対応を積み重ねてきた結果、現状では、サポート内容数はほぼ限界まで達していると思う。今後は個々の取組をより効果的に実施できるよう、取組の質を見直し、向上させていくことが大事だと思っている。例えば音声ガイドについては、内容に踏み込んで



手話通訳付きの解説 撮影：尾形美砂子

精査していくなど行ってきたい。

また、意見交換会は改善点を伺いアップデートしていくという趣旨で実施していたが、令和4年度は、改善という視点だけではなく、障がいの有無に関わらず感想をシェアし合って、どのような体験ができたのかを掘り下げることが目的に実施した。昨年度は初めての試みでもあり、今後、会の組み立てをもう少し工夫して実施したい。



触れる能面展示 撮影：尾形美砂子

## 【「バリアフリー能」事業データ】

開始・実施回	平成12年開始。令和5年度までに22回開催。第6回以降は毎年3月に実施
入場料	(令和5年度参考) S席 4,500円 A席 4,000円 B席 3,500円 介助者1人まで無料
補助金	独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
参加者の状況	障がいのある方、介助者、健常者もしくは介助のいない方が、それぞれ約30%ずつ。約60%は横浜市内で、残りはその他の関東圏。音声ガイドの利用者はコロナ前で60(介助者の利用も含む)令和4年度は30ほど。毎年来場するリピーターも多いほか、事業をきっかけに友の会への入会者も出てきている
広報	市内の協力団体や特別支援学校、福祉施設、点字図書館など、首都圏全般に展開。 他施設の職員とのつながりなども活用
他機関との連携	*令和4年度の後援・協力団体 後援：社会福祉法人横浜市福祉協議会障害者支援センター 協力：公益社団法人横浜市身体障害者団体連合会、横浜市心身障害者を守る会連盟、横浜知的障害者関連施設協議会、NPO法人横浜市精神障害者家族会連合会、横浜市障害者地域作業所連絡会、神奈川県知的障害者施設団体連合会、一般社団法人やまゆり知的障害児者生活サポート協会、神奈川県手をつなぐ育成会、国立能楽堂、社会福祉法人トット基金、パイオニア株式会社(順不同)
視察など	公益社団法人能楽協会、国立能楽堂等、他機関・施設へのノウハウの提供。みなとみらいホール主催「ミュージック・イン・ザ・ダーク(視覚障害のある演奏家を含むアンサンブルが暗闇の中で演奏し、視覚以外の感覚で音楽を享受するコンサート)」(会場は横浜能楽堂)への協力。KAAT、神奈川県立音楽堂、あうるすぽっと、アーツカウンシル東京、能楽協会、東京ドームなどの視察受け入れを実施

### 横浜能楽堂

所在地：〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘27-2  
TEL：045-263-3050

設置者：横浜市

開館：1996年

管理者：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

規模：本舞台(486席)

施設の特徴：明治8(1875)年東京の旧加賀藩主前田邸に建築された関東最古の能舞台を移築・復元。年間24回(令和4年度)の能楽公演等を上演する専門施設。  
\*令和8年6月まで大規模改修のため休館中。

ホームページ：<https://yokohama-nohgakudou.org/>



横浜能楽堂本舞台

※写真はすべて横浜能楽堂提供